

目の前の課題に
一つ一つ向き合ってきたら、
今、ここにいた。



あの人と、春日井と

本山 ゆかり

現代美術作家

絵を描くのが好き。
でも、その「好き」って一体、何だろう？

少年ジャンプをむさぼるように
読んだ小学生時代、漫画やアニメ
に興味を持ち、中学時代は美術部
で絵を描くことに熱中したとい
う、本山さん。「これから私、どうす
るんだろ？」そんな、もわんとした
時期に、高校で美術科に進学する
という道があることを教えてもらっ
た。目標が明確になったことで、急
にやる気がみなぎった。しかし、そ
れは悪戦苦闘の始まりだった。

「絵を描くってどういうこと？
物を見るってどういうこと？ ただ
単に目の前のものを綺麗に描くだ
けが絵ではない。デッサン力が無く
ても、面白い絵は描けるのでは？」
美大予備校の先生から言われたこ
とにショックを受けた。「私がこれま
で描いてきた絵は、ただの綺麗な絵
だった。どうすればいいんだろう？」

東京藝大の受験では、黒い布を
被った石膏像がモチーフだった。「何
を描いていいのかわからなかった。
面白くないものから面白いものを
見つけるのって、めちゃ難しいじゃ
ないですか」。結局、描きあげること
ができなかった。

実家から通える愛知県芸に進
学、アニメのセル画のような感覚で、
透明のアクリル板にキャラ絵を描
く日々が続いた。アート作品として
購入してもらえる機会もあったが、
可愛い女の子の絵はただの消費対
象になりやすいことに気付き、絵が
描けなくなった。「絵を毎日描かな
ければ死んじゃう！ みたいな感じ
はなくて、むしろそうじゃないこと
がコンプレックスだったんです。で
も、ずっと絵を描いてきたのに、やめ
るの、悔しいじゃないですか」

「美しい」の範囲は、とっても広い

4月に地元・春日井で展覧会を
開く。見に来る方は「これって絵な
の？」と戸惑われるかもしれない。本
山さんの絵は、ロープや布を使っ
たり、白と黒のアクリル絵の具でド
ロ잉した透明

色を決めることだという。

「絵具を混ぜると、色は無限で
す。しかし、絵具という既製品を
作っている人がいて、その人たちはこ
の色が最高！」と思って作っていらっ
しゃるはず。だから、
私はその色を改め
て選び直し、色に触
れることから始め
たと思っています」

「簡単に「絵」とい
うけれど、絵にはた
くさんの構成要素が
ありますよね。何を
描くのか、何に描く
のか、どの色を使う
のか、どんなもので
描くのか、表は？裏
は？…。それらを選択する自信が、
私には無いんです。手で描くこと
さえ、躊躇します」



「布も同じなんで
す。最高の布を引き
継いで、最高の組み合
わせて作品作りま
す！というつもり。布
を縫うと凹凸がで
きるから、影ができ
るじゃないですか。
その陰影は、絵の線に通じるところ
があると思って」。本山さんがミシン
を用いて縫った線には、花やナイフ
などのモチーフが浮かび上がる。そ
れは、いわゆる絵とは程遠いかもしれ

れないが、やはり絵でもあるのだ。

そんな本山さんにとっての美しさ
とは？「万物に美しさを見出すこ
とってできますよね。視覚に頼らな
い美しさもある。私は作品制作を
通して、人はそこに何を観るのか？
という訓練を行っているように思
います」。目の前のものと格闘してき
た、本山さんならではのリアルな言
葉がここにあった。

1992年生まれ、愛知県春日井市出身。2017年京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。絵を構成する要素を分解しながら、絵をつくる／鑑賞するときに起きるひとつひとつの出来事を見つめる作業をしている。主な個展に「その出入り口（穴や崖）」（Yutaka Kikutake Gallery／2019）、主な展覧会に「2020年度第3期コレクション展」（愛知県美術館／2020）「この現実のむこうにHere and beyond」（国際芸術センター青森／2017）「裏声で歌へ」（小山市立車屋美術館／2017）がある。



本山 ゆかり
Motoyama Yukari

本山さん 個展のお知らせ

2021.4.23(金)～5.16(日)

コインは
ふたつあるから鳴る

◎文化フォーラム春日井・ギャラリー

入場無料



「グリーンピア春日井」
本山ゆかりと春日井と

幼少期に家族でよく遊びに行き
ました。今でも覚えているのは温
室のこと。見たことのない南国の
大きな木があつて。
家の近所にも、どん
な時期でも温
かく包んでく
れる場所が
あるって、す
ごく良くな
いですか！